大館の林業 －その2－

杉の伐採現場と製材所を訪ねて

リポーター
鳥潟宏一さん
（南ケ丘）

前回（8月1日号）は、大館の林業がどうなっているのか知りたくて、米代東部森林管理署でお話を伺いました。今度は実際の現場を見てみたいと思い、杉の伐採現場と、製材所を訪ねました。

伐採現場では

「長走の現場が今日か明日に行かないと、来週には毛馬内の方に移ってしまうそうです。」土曜日の朝に業者さんから連絡がありました。妻と小学生の娘二人も引き連れ一家四人でその現場に行きました。長走小学校の跡地に駐車し外に出てみると、もうチェンソーの音が聞こえてきました。

バックホーで木を引き上げます

校舎の脇を少し登ったところではバックホーが動いていました。近くまで行くと、私達が登ってきた道路の下の方で、伐採が行なわれていました。山の斜面に立つ杉は真っすぐで、ずっと高い方まで枝がなく美しい姿でした。きっと枝打ちなどよく手入れされた林だったのでしょう。あまり太くはなかったのですが、子供達が年輪を数えたら、三十五年ぐらいのものでした。間伐だと聞いていたのですが、いざ現場に行ってみると、全ての木を切る皆伐だったため、私には少しもったいないような気がしました。

木を切るのはあっという間でした。斜面の下の方でチェーンソーの音がしたと思ったら、もうバサバサと音をたてて一本の杉が倒れました。今度は別の位置から、何か合図を送っています。危ないよと言われ少し下がると、こちら側の斜面の上の方へ向かって倒れてきました。倒れる木を他の木にぶつけないで、しかも引き上げやすい位置に倒しているとのことでした。切り倒された木は上へ引き上げられ、すぐに所定の長さに切り揃えられました。

所定の長さに切り揃えます

製品として市場に出るまで

山で伐採された木は、その後どうなるのでしょうか。

市内の製材所を見学させていただきました。こちらの製材所では杉だけを扱っており、その大部分を近郊の民有林から、その他が原木市場と森林管理署（旧営林署）から仕入れています。出荷先はほとんどが関東方面で、地元にはわずかしか卸していないそうです。関東では一年中市場があり、秋田杉はブランドになっていて、人気があるためなのだそうです。

工場を案内してもらいました。敷地内には丸太や乾燥中の木材がたくさん積まれていました。中は私が思った以上に、機械化されていました。木を一度に十数本に切り分けてしまう機械や、自動的に丸太の四面を切って、その厚みを機械が読み取り同じ厚さごとの場所へ持っていく機械など、見ていて楽しくなるようなものがありました。しかし丸太をどう切り出すかは人間の目で判断して、セットしていました。真っすぐではない